

CORRENTE

Centro Culturale Italo-Giapponese

RIITALIA(イタリア再発見)⑬

2011年3月11日、東京にて

国司 航佑

2011年3月11日午前11時、新東京国際空港にいた。筆者は、2010年から2012年にかけてイタリア、ナポリに留学していたのだが、この時期、一時的に帰国していたのである。ナポリから帰ってくると、東京は異様な都市に見えた。制服を着た小学生が、行儀よく列を作って歩いていて、非常にかわいらしい。そう筆者が思ったのは、ナポリで見てきた小学生がとんでもない奴ら(ナポリでは scugnizzi と呼ばれる)ばかりだったからかもしれない。彼らは、観光記念物にボールを当てたり、街角に爆竹を設置したり、真夜中に騒ぎ回ったり…と年がら年中悪事を働いているのである。話を成田空港に戻そう。実を言うと、例の日本人小学生の「かわいさ」に対して、筆者は若干の居心地の悪さを覚えていた。このような表現が適切かどうかは分からないが、それが、ペットに求められるかわいさと似たもののように映ったのである。かわいさを求める大人社会——子供たちはその欲望の犠牲になっているのではないか？そんな疑問が頭を擡げた。

街なかは非常に騒々しい。だが奇妙なことに、誰一人口を開いていない。皆、携帯電話の画面にかかりきりで、自分の世界に入り切ってしまう。電車の車内アナウンス、パチンコ屋から漏れ出てくる大音量のBGM…なんらかの音楽があちこちでかかっている。ところが街行く人々は、自分の携帯するi pod(?)を聞いている。なんという音の無駄遣い！JR武蔵小杉駅では、長い通路の真ん中に係員が立っている。彼の仕事は、通行人に左側通行を守らせることだった。筆者がそこを通過しようとしたとき、周りに人影はなかった。

だがそれにも拘わらず、彼は筆者に命じた——左側をお通りください。…何かがおかしい。ナポリもものすごく変だったが、東京も、やはりとても変だ。こんなことを考えながら、筆者は横浜にある実家に着いた。



【JR 武蔵小杉駅改札】

遅れた昼食をとろうとしたその瞬間であった。地面が揺れ始めた。非常に強く、とても長い揺れである。これまで経験したもののうち最大の地震であったことは、すぐに分かった。筆者はまず頑丈な机の下に体を潜めた。しばらくすると地面の揺れは収まった。そこで、再び大きな揺れがやってくるかもしれないと考え、両親とともに家の外に出た。子供の頃受けた防災訓練の成果が活かされたようである。周りを見ると、近所の人も同じように外にいた。そして、普段めったに言葉を交わすことのない隣人と、会話をした。異常事態が発生していたことは明らかだったが、詳細はよく分からなかった。

少し時間が経ってから、我々は停電が生じていたことに気付いた。そして、電気がなければ日常的な行為の大半ができなくなってしまうということ

を、身を以て思い知らされた。まず水が使えない。筆者の住むマンションでは、電動式ポンプによって貯水槽から各家庭に水が届くというシステムを採用していたから、電気が使えないことは即水道が使えないことをも意味したのである。次に、料理ができない。ガスはいまだ利用可能であったが、電燈のつかない中、夕飯を作ることは——少なくとも普段通りには——できそうになかった。そして、暖房器具が使えない。困ったことに、その年の3月は例年に比べても非常に寒かった。実はその日、筆者は体調を崩しており、13時間以上乗っていた飛行機の中でも一睡もできていなかった。だから、シャワーが浴びられないという些細なことも、かなりのストレスになった。

だが、とにもかくも夕食のための食材を確保しなければならない。そこで筆者は、母と共に外へ出た。無論、普通の商店は、電気がなければ通常通りの営業を行えるはずがない。実際、町全体が店じまいとも言えるような状態にあり、そこには普段とは全く違う物静かな雰囲気か漂っていた。だが少し経つと、驚いたことに、いくつかのコンビニエンスストアが店を開け始めた。どうやらそれは、店員たちの臨機応変な対応によるものだったようだ。真っ暗な店舗の中に響く、店員と客との会話の声。こうした町の光景は、筆者が日本に帰ってきたときに感じた、東京の異様さとは対照をなすものであった。筆者はこの時、その異常事態のうちに、この国の本来の姿を垣間見たような気がして、不徳にも一種の安堵感を覚えてしまった。

それから1週間ほど、様々な思いが心中に去来して、仕事が手につかなかった。我々の国は一体どうなってしまうのだろうか。このような自問を繰り返していると、自分が日本人であるという実感がこれまでになく強く現れてきた。だが筆者は、ヨーロッパ的なメンタリティをもった人間でもある。心の中で肥大化していく「日本人であることの自覚」を批判的な目で見張る、もう一人の筆者がいた。

その頃、筆者はイタリア(だけではないが)の友人・知人から多くのメッセージをもらっていた。「Siamo con te」(君と一緒にいるよ)であるとか、「Puoi contare su di me」(私に頼ってきていいよ)であるとか、それぞれ、愛情にあふれる言葉を伝

えてきてくれた。こういう時に、包み隠さず愛情を表現できる人間は非常に格好がいい。彼らの隣人愛の深さに、筆者は改めて感銘を受けた。その一方で、その内容の率直さに少し戸惑わされたメールもあった。「あなたの家族だけでも(*筆者はナポリに家があった)こちらに越してきたらどう? 私たちは問題なく彼らを受け入れるから」。このメールの送り主は、我々日本人がどうしても考えにくかったこと、つまり日本全土が居住不可能な地域になることを想定して上のような提案をしていたのだ。

自分と家族だけが助かるという状況を想像してみたとき、筆者は自分がそのような事態を全く望んでいないということに気付いた。そうなるくらいなら、不可能だと分かっている日本全体が助かるためのなんらかの努力をして、その上で皆とともに死んでいく、こちらの方がはるかに潔いだろう、とそう思ってしまったのだ。もちろん、本当にそういう選択を求められる状況下に立たされたとき、実際に上のように行動するかどうかは分からない。だが、想像上でもそう考えたことは事実である。そして筆者が推測するに、当時このように考えていた日本人は決して少なくなかったはずである。

大惨事の中パニックに陥らず、秩序を守り、他人を思いやりながら行動した。日本人の、とりわけ東北地方の被災者の方々のこうした振る舞いは、世界中のテレビ局で賛辞と共に報道された。世界中が日本を称賛し、日本人もまた、それをいたくありがたがった。だが、こうした報道について、あるイタリア人の友人が鋭く批判的なコメントをしてきた。「ある民族についてその全ての側面を称賛するのは、それはそれで一つのレイシズムだ」。これは、この友人の性格を熟知していない読者諸氏にとっては理解しがたいメッセージかもしれない。だが筆者は、そこに込められた意味を読み取って感動した。当時思い悩んでいた問に対して解を与えてくれるような言葉だったからである。

他人を思いやり、秩序を重んじる——日本古来のこうした伝統は、それ自体非常に素晴らしいものに違いない。だがそれは、同時に「個人の意思を軽視する」という否定的要素を孕む伝統なの

ではないだろうか。被災された方々は、不満も言わず自らのなすべきことを黙々とこなしていった——それはまさに、世界に誇るべき日本人の姿であったろう。しかし、誰も不満を言わない社会というのは、その実、誰も不満を言えない社会に他ならないのではないか。そして、その誰も不満を言えない社会というものは、ともすれば人権を軽視しかねない、極めて恐ろしい社会なのではないだろうか。

筆者は翻って、ナポリのことを考えた。仮にこの町に、同規模の災害が発生したとしよう。ナポリ市民はエゴの塊であるから(失礼!)、町全体が凄まじいパニックになることはほぼ間違いない。災害の時、人々の混乱は不可避免的に事態を悪化させるものである(だからこそ、パニックを起こさなかった日本人は世界中で絶賛されたのだ)。とすると、ナポリでそのような災害が起きた時には、死傷者の数も膨大なものにならざるをえないだろう。こうした観点から見れば、日本社会は、災害時に被害を最小限に抑えることができる社会であるから、ナポリより明らかに優れた社会であると言える。しかし、一人一人が自分の感情を爆発させて、パニックを起こす——個人の意思の働く余地のある社会は、同時に、人権を大切にできる社会だと言えないだろうか。

2011年6月。イタリアで、原子力発電所の建設(とその他3つの問題)を巡る国民投票が行われた。筆者が今でも覚えているのは、Movimento 5 stelle(五つ星運動)という名の政党のリーダー、ベッペ・グリッロが投票前日に残した次のようなコメントである。「国民投票の結果に関わらず、原発政策を推進することは不可能だろう。なぜなら、原子力発電所を建設しようとするれば、間違いなく市民戦争が起こるからだ」。市民戦争、それ自体は悲惨なものに違いない。だが、自分たちの権利を守るために命がけになれる人間は、模範的な「国民」であるのかもしれない(* 実を言うと、「国民」

という概念に相当する単語は、西洋諸語には存在していない)。

結局、国民投票によって原発推進案は否決された。これについてある日本の経済学者が次のようなコメントを残したのだが、それもまた印象深いものであった。「イタリア人は、国民投票の結果に狂喜乱舞しているようだが、原子力エネルギーがないと経済発展はできないぞ。それでいいのか?」。果たせるかな、イタリアは今、未曾有の経済危機の中にある。それに対して我が国は、久しぶりに経済復調の兆しを見せている。



【五つ星運動党首ベッペ・グリッロ】

震災から3年が経過した。東京の街並みは、以前と変わらない。日本人の心のかたちには、変化があったのだろうか。

[図版の出典]

<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%AD%A6%E8%94%B5%E5%B0%8F%E6%9D%89%E9%A7%85>

http://it.wikipedia.org/wiki/File:Beppe_Grillo_-_Trento_2012_01.JPG

(元当館スタッフ)

イタリア発月刊日本語新聞

COMeVA
Pubblicazione mensile distribuita in Italia e in Giappone

イタリア在住日本人と日本人観光客のための情報誌

編集・発行 NIPPON CLUB SNC
Via Torino, 95 - 00184 Roma, Italy
Tel. & Fax : (06) 4743. 212
E-mail : comeva@nipponclub.it
URL : www.nipponclub.it

ローマ滞在日記①

* できなかった映画の仕事 『グレート・ビューティー/追憶のローマ』*

二宮 大輔

ローマに留学していた頃、映画関係のアルバイトをする機会が何度かあった。さすが映画の町ローマといったところだ。エキストラや字幕の制作など、貧乏学生だった私はタイミングが合えば何でも引き受けた。いわゆる短期アルバイトで、決して大きな収入にはならなかったが、それでもスタッフとの会話やセットの見学などを通して、映画の世界を垣間見るのはとても楽しかった。

留学生活も終わりを迎えようとしていた2012年の初夏、とんでもなく大きな映画の仕事が舞い込んできた。長らく連絡を取っていなかった現地の友人から電話があり、ある映画のために日本人をさがしているという。大学で映画研究を専攻していた彼は、映画監督のアシスタントを始めたらしい。いま制作中の映画で、日本人ツアー向けのイタリア人観光ガイドが登場する。ガイド役の女優に日本語指導をしてほしいというのが、今回の仕事内容だ。うさんくさい仕事だな、と訝しんでいる僕に、彼は説明を続ける。「この映画の監督はパオロ・ソレンティーノなんだけど…」。耳を疑った。ソレンティーノといえば、時代の寵児とも言うべき大監督ではないか。その映像は芸術性が高く、世界的にも高評価を得ている。前作『きっとここが帰る場所』(This must be the place)は、シヨン・ペンを主人公に据えた壮大なロードムービーで、1970年代ニューウェイブ・バンドの大物デヴィッド・バーンが本人役で登場することでも話題を呼んだ。当時ソレンティーノは、国際映画祭での受賞にもっとも近い監督として、イタリア国内で期待が高まっていた。そんな監督の新作映画からお声がかかったのだから、興奮しないわけにはいかない。

ところが、よくよく日程を聞いてみると、私がすでに日本に帰国している時期に日本語指導、及び撮影があるらしい。しかたなく別の日本人に仕事を譲り、後ろ髪を引かれる思いでイタリアを去っ

た。しかし、ローマが舞台で日本人ツアーが出てくるとは、一体どんな映画なのだろう。

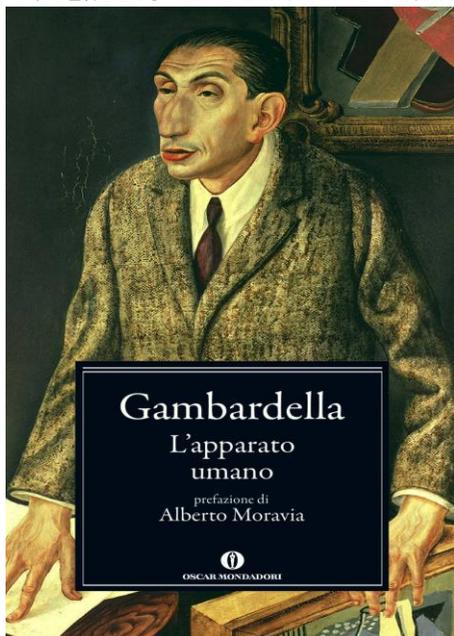
それから約一年後、DVDでソレンティーノの新作を購入して、疑問は一気に解消した。なんと、問題の観光ガイドの場面が映画の冒頭を飾っていたのだ。場所はローマが一望できるジャンニコロの丘。噴水の前で、観光ガイドが日本人団体客にこの地の歴史について説明をしている。ひとりの日本人中年男性が団体から抜け出し、高台の欄干に向かい、ローマの風景を写真に収めようとする。何度かカメラのシャッターを切った後、突然の心臓発作で倒れる。永遠の都の美しさを前にした、中年男の死。これがソレンティーノの新作『グレート・ビューティー/追憶のローマ』(La grande bellezza)の冒頭だ。

作品の主人公は、トニ・セルヴィッロ演じる熟年記者ジェップ・ガンバルデッラ。作家としても名を馳せた彼だが、豪華なパーティーを渡り歩きながらも、どこかしら自分の生活に虚しさを感じている。初恋の人の死を知り、その虚無感はさらに高まる。そしてジェップは、さまざまな出会いと別れを繰り返しながら、ローマを舞台にグレート・ビューティー(大いなる美)を追い求める。助演陣も実に個性豊かだ。神の教えをそっちのけで料理の話ばかりする枢機卿、希望をなくした熟年のストリッパー、みんなから相手にされずローマを去る決意をする劇作家など、一癖も二癖もある登場人物たちが物語を彩っている。さらに、日本人観光客の死で示されるような、ローマの美しさを象徴する場面や、過去のイタリア映画の名作を想起させる場面が随所に挿入されており、実に濃厚な作品となっている。

これはとんでもない大作が世に出たなと思っていたら、今年の三月にアカデミー賞外国映画部門を受賞した。イタリア映画が同賞を獲得するのは、1998年度の『ライフ・イズ・ビューティフル』以来、十五年ぶりだ。イタリア国内では大いにもてはやされ、いわばソレンティーノ・ブームともいうべき状態になっているようだ。

余談ではあるが、作中でジェップは『人間装置』

(L'apparato umano)なる小説を執筆し、文学賞を獲得したという設定になっている。映画の人氣が相まって、架空の小説『人間装置』の表紙を勝手にデザインし、それらを公開しているウェブサイトがある。実在する出版社をモチーフに表紙がデザインされているのだが、各社の個性をうまく捉えていて、とても秀逸なパロディーになっている。例えば、大手モンダドーリ社バージョンは、古い肖像画風の表紙で、前書きを現代文学の代表的作家アルベルト・モラヴィアが書いているといった具合だ。どの表紙も非常によくできていて、イタリアの小説を読む身にとっては、なかなか楽しい。



【ガンバルデッラ著『人間装置』】

さて、話を戻そう。この映画には大きな謎が横たわっている。タイトルにもなっている「大なる美」とは何のことなのか。ソレンティーノ・ブームによって『グレート・ビューティー／追憶のローマ』に関する記事、インタビュー、評論が次々と発表されているのだが、その中にこの謎を解く鍵となる資料がある。フェルトリネッリ社から刊行された映画のフォトブックだ。そこではソレンティーノ監督自身が「大なる美と言えるかもしれない原体験」について語っている。まとめると以下ようになる。

1989年、十九歳だったソレンティーノは、映画を撮るのに興味を持ち始め、故郷のナポリから、頻

繁にローマに出向くようになった。そんなある日、ローマの高級住宅地のバルで、衝撃的な場面に出くわす。東欧出身の美女と、テレビ会社役員の男性が話をしている。役員はかなりのお偉いさんで、この美女をタレントとしてデビューさせれば、芸能界での未来を保証できるほどの力を持っているようだ。そんな彼が、この店の名物サーモンのカナッペを東欧の美女にしつこく勧めている。「歯が汚れるから食べたくない」と断られた役員は、自分ひとりで山ほどのカナッペを平らげてしまった。何気なく二人を眺めていたソレンティーノ青年は、男がポケットに手を当てて探し物をしていることに気づく。タバコか、はたまた財布をさがしているのだろう。そんな想像していたら、男のポケットからは、なんと歯ブラシと歯磨き粉が出てきた。つまり男は幾度となくこの店に同じような女性を連れてきては、同じように口説いて、同じように断られていたのだ。ソレンティーノは話の結末を語っていないので、その後、美女と役員がどうなったのかはわからない。ただ自分の想像を超える現実の意外性に、未来の大監督は驚嘆したのだった。そしてこの瞬間に決意した。「ローマについて語るのではなく、ローマを内包する映画をいつかこの手で撮ろう」。彼はこの時の感動を忘れぬまま、二十年の時を過ごし、そして今、思い描いていた映画を現実のものとした。

この話で示されているのは、歯ブラシ男のような現代上流社会の俗っぽさが、3000年の歴史を誇る永遠の都で横行しているということ。どうやらこの二面性が「大なる美」にとって重要なようだ。ここで語られている美とは、ジャンニコロの丘から一望できる景色でも、コロッセオの荘厳さでもない。もしくはそれら全てと言うべきだろうか。つまり、横行する俗っぽさや虚飾を通して眺めたローマこそが大なる美なのだ。地元の作家マルコ・ロドリも、レップリカ紙に掲載された本作の批評で「ローマでは、大なる美と大なる醜が親密な関係にある。互いに補充し合う敵対関係になっている」と述べている。私自身ローマに暮らしていて、このような二面性を感じる事が多々あった。ブルーライトで装飾されたバーやディスコだったり、ギャング団のボスが埋葬されている教会だったり、様々な局面や何気ない日常の中で、美と醜の親密な

関係を目の当たりにした。そんなわけで、『グレート・ビューティー／追憶のローマ』の示唆に富む映像も、完全に理解しているかは別にして、すんなり頭に入ってきた。

物語の終盤で、ジェップは「私は大いなる美をさがしたが、見つからなかった」と告白する。物語の最後まで積み上げてきたものを鮮やかに裏切る発言だ。彼にとっての「大いなる美」とは、初恋の思い出の中にある純粋な心だったようだ。だが、作品全体に見る美しさは、先述した二面性で貫かれている。注意して映画を鑑賞すれば、歯ブラシ男の話と同じ構図のエピソードがいくつもあることに気づくはずだ。読者の皆さまにも、二時間を越えるこの大作映画で、ぜひ大いなる美を味わっていただきたい。

最後に、見所をもう一つ付け加えておこう。そもそも私に仕事に来るはずだった観光ガイドの日本語指導なのだが、その成果や如何に…。イタリア人女優にとって、日本語を発音するというのはなかなか難しかったようで、映画の冒頭では、かなり苦労の跡が見られる。『グレート・ビューティー／追憶のローマ』は今年の秋から全国公開とのこと。他の場面も魅力的だが、冒頭の観光ガイドにも注目してみたいはいかがだろうか。



【グレート・ビューティー／追憶のローマ】
(元当館語学受講生)

イタリアンレストラン紹介 ～京都～

CUCINA KURAMOCHI

2011年9月オープン、場所は京都府庁前。
トスカーナ地方とフリウリ地方で修業。
昼は1250円～、夜は2900円～のコースと
アラカルトもあり。

特典(日本イタリア会館会員証をお持ちの方)
:グラスワイン一杯サービス

住所: 京都市中京区釜座通丸太町下ル
榎屋町149 サンモリタ1F
電話: 075-253-6336
ホームページ: www.cucinakuramochi.com



…会館だより…

文化セミナーご案内 『カンツォーネ講習会』
日時: 第1回 2014年6月6日(金) 14時～16時
第2回 2014年6月13日(金) 14時～16時

1回分 個人維持会員 2,500円 受講生・一般 3,000円
全回分 個人維持会員 4,000円 受講生・一般 5,000円

「アモーレスクーザミ」や「マリウ愛の言葉」など、4曲を歌います。皆で楽しく歌うことが目的なのでお気軽にご参加ください。

編集・発行 / (公財) 日本イタリア会館
〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町 4
TEL: (075) 761-4356/FAX: (075) 761-4357
E-mail: centro@italiakaikan.jp
URL: <http://italiakaikan.jp/>